

Handsome

発行人：鳥取県西部中小企業青年中央会 会長 水 康德 編集責任者：桶村清子 34期広報委員会 印刷所：東京印刷株式会社

9月例会開催

『青年中央会 de 寺子屋』



平成20年9月16日(火) ホテルサンルート米子において9月例会が開催されました。

冒頭に水会長より、「地域における中央会のプレゼンスを維持していく必要があり、そのために仲間を増やすことが重要である」と挨拶がありました。



続いて委員長タイムでは、環境問題委員会 森田委員長より、モータースポーツ業界の環境問題への取り組みについての説明があり、最後は委員長の趣味でもあるF1に関して幅広く話をされました。

例会は、講師に株式会社寺子屋モデル代表世話役社長 山口秀範氏をお招きし「青年中央会de寺子屋～偉人に学ぶ 我が家の家訓づくり～というテーマで講演が行われました。

冒頭で、昨今の日本における教育問題についてお話を頂き、3つのポイントを説明されました。1つ目は、日本の教育現場におけるいわゆるモンスターペアレントの現状。2つ目は、OECD学習到達度調査及びゆとり教育について、先生の子供を導く姿勢及び子供たちの取り組む姿勢の問題点を言及されました。3つ目は、ままと遊びの主役について。一昔前は母親が主役であったが、現代はペットが一番人気の

役。家庭の中では、母親は人気のない役柄であり、子供が憧れを持たないポジションのようです。

これらの問題は氷山の一角ではあるが、日本人が本来もっていた大事なものを失ってしまったために蔓延した問題で、皆が忘れてしまったものを取り戻す努力作業をし、次世代に繋げていかなければならないと山口氏はその思いを熱く語られました。



長い歴史の中で、数々のお手本にすべき偉人がいます。しかしながら最近では、名前は知っているが、その偉人がどんな生き方をしたのか、何を大事にして生涯を送ったか、それを教育現場で教えてもらう機会がないようです。その結果、現代の日本人は自分の国、地域に誇りを持っていない者が多くなっているのではないかと、自分に自信がないため、自尊心が欠如してきている。モラルの低下や犯罪の増加の背

景にはこういった事情があるのではないかと、現代の日本人が忘れてしまったものを少しでも取り戻せるために何をすれば良いのか、という問題提起をされました。さらに、私たちは先人から色々なものを受け継いで生きている。それを次世代にバトンタッチするにはどうすれば良いのか、という問題提起もありました。

そして、偉人に学ぶ我が家の家訓づくりという今回のテーマに触れられ、家訓も現代の日本人が忘れてしまったもののひとつに含まれると述べられました。昨今、家訓を取り上げられる機会が少なくなっているようです。山口氏は、家訓を作るためには、まず自分自身が何を大事に生きているか、自分の価値観とは何か、それを見直す必要があることを述べられました。自分の価値観等の再認識の必要性を踏まえた上で、家訓づくりの参考として吉田松陰や福沢諭吉等の偉人の家訓を紹介して頂き、9月例会は閉会しました。

私にとって今回の例会は、自分の子供に何を伝えることができるのだろうか、等身大の自分自身をうまく伝えることができるだろうかということを考える上で、いい機会であったと思います。これから家庭を育てていく私にとっては、素晴らしいタイミングでの講演でした。

(記事：田中)



委員会訪問

Neo・ラヴィ委員会の巻

高齢者介護研修@デイサービスセンターふくよね
 日時:平成20年8月26日(火) 19:00～
 場所:デイサービスセンターふくよね



Neo ラヴィ委員会は今期、「こども」と「高齢者」をテーマに活動しています。今回は、高齢者の現状把握の目的もかね、藤森OBを講師に「デイサービスセンターふくよね」に於いて高齢者介護研修を開催しました。講師より、先ず介護保険料の制度の講義を受け、続いて高齢者の身体的・メンタルの特徴を学習しました。最後に、実際にお風呂場で介護体験をしました。普段、高齢者介護という問題を意識することが少ない若手会員も熱心に耳を傾けていました。

『わたしたちが住む市町村が運営し、40歳以上のみなさんが被保険者となって保険料を納め、介護が必要になったときに、費用の一部を払ってサービスを受けることができる仕組みで、介護保険のサービスは、申請し、要介護認定を受けた65歳以上の人と、40歳から64歳の人で、老化が原因とされる特定疾病により、要介護認定を受けた人が利用することができます。』

「デイサービスふくよね」は、定員が20名の通所介護施設ですが、利用者は一日平均14人位であること。また、介護保険料の最も高い所は沖縄で4850円、一番安いのは茨城で3461円。米子市は4761円でかなり高いほうであること。その理由は、基



準額の算定式が、市町村の総費用を保険者数で割って計算されるため、施設が充実しているために利用者数や利用額が高いことがあげられる。』等、講師により高齢者の置かれている社会制度的現状を介護保険制度をた

よりに説明していただきました。続いて、高齢者の身体的特徴を「筋力の低下」・「高血圧症・動脈硬化」・「脱水症状・熱中症」・「糖尿病」・「認知症」の5つの視点から解説されました。特に認知症については判断基準や認知症患者への対応方法等、大変興味深く勉強させていただきました。

最後に、実際の体験は永田副委員長が実験台になり、車いすや入浴介護等を体験させていただきました。実際に高齢者介護施設に行くこと自体が初めての会員も多く、介護の現場を実際に見学したこと、またその実体験をなまで聞き体験できたことは、委員会のテーマである「高齢者」の現状認識という課題に関して非常に実り多き委員会活動になったと思います。

(記事:内田)



特 別 寄 稿 文

『宇佐見新OB会長を訪ねて』



宇佐見 明OB

鳥取県西部中小企業青年中央会OB会第7代会長を務めさせていただくことになりました。私自身予期せぬ指名でしたので戸惑いもありましたが、お受けした以上は精一杯頑張るつもりであります。どうぞ宜しくお願いいたします。

振り返ると、昭和56年7月に32才で青年中央会に入会し、今日まで人生の半分近くをこの会に係らせていただきました。本当に多くの先輩、同期、後輩を得ることができ、何でも相談できる友人に恵まれたことは大変幸せなことと感謝しています。

一人ひとりの夢の実現は、自分だけの力や考えで達成することは難しいけれど、周りの協力や地域、社会に支えられて叶えられるものだという事を、会の活動の中で経験させていただきました。また、相手の言葉を素直に聞く、傾聴力も増したように思います。人間力形成にとって大変ありがたい会だと思えます。

さて、今年度で西部青年中央会卒会者は324名、OB会加入者も217名となり、現時点では現役会員の約2倍の数となっています。さらに、そのほとんどのOB会員の方々は企業経

営あるいは役員・管理職として現役で活躍されています。この状況を思うとき、OB会として、または現役会員と連携して何かできないものかなと考えております。まずはできる限りお互いの交流を図り、その機会を充実したものにしたいと思います。その説は是非ご協力をお願いいたします。

鳥取県青年中央会創立10周年記念誌の編集後記に「草創のとき、石油ショック直後の産業経済の危機に直面し、『何かをしなければ』の行動意識に端を発し、会員の団結と使命感が数々の行動を生んだ」とあります。戦後30年、終戦の混乱を懸命に生き抜いてきた中小企業経営者から次の世代にその経営が引き継がれ、新しい時代感覚と中小企業の存立と発展、社会的地位の向上を目指した時代の中、昭和50年に本会が誕生したのです。厳しい経営環境下、この精神はその時代だけでなく、現在も将来にも通じることと思います。

会の発展のためには、会員企業の体質強化が欠かせません。経営をする以上、いかに環境が厳しくとも、時代の変化に対応して、経営を維持し発展させる責任があります。本会がそうした面でも、支えとなれる会でありたいと思います。

「数は力であるが、鳥合の衆になってはいけぬ」入会間もない頃に、松田一三先輩から教わった言葉です。今もこの言葉は私自身、どんな会に所属したときも大切に思っています。

現役、OB会員総数で400名を超える西部青年中央会として、英知・友愛・団結のもと、地域社会に必要とされる団体であり続けることを目指したいと思います。

念願のJリーグ昇格を目指して！～vs刈谷戦レポート

今期念願のJリーグ昇格（JFL 4位以内）まで、戦績においては、あと一步の所まで来ていた。資金面、観客動員数など超えなければいけない数々の問題がある中、僕ら一市民ができる事。それは、ただひたすら信じて応援する事しかなかった。…とは言うものの、恥ずかしながら、このたびはじめてSC鳥取の応援に行った。



まず驚いたのが会場外の雰囲気。屋台、テントがたくさん出ており、人・人・人で埋め尽くされていた。なんと観客動員数7117名。過去最高数のサポーターが東山競技場に集

結したのである。我らが中央会メンバーにも何名も出会った。

芝生席も埋め尽くされ（それは凄い事らしい）、興奮も最高潮に達しキックオフ。で試合は始まったのだが、普段TV観戦しかしたことのない僕にとって、解説なしは正直つらかった。選手も小さくしか見えない…。でもこれが本当のスポーツ観戦なんだろうと思った。ワンプレーワンプレーに、会場全体で

喜一憂。惜しいシュートに全員で「は———あ…。」のため息。ゴールには全員でガッツポーズ。が…残念な事に、結果は1-3で惨敗。

僕は、サッカーの事は正直あまり分らないので、試合内容についてはコメントできない。ただ厳しい事を言わせてもらえば、「これが、JFL上位同士の試合なのか？」と思えなくもない。しかし一番悔しくて歯がゆい思いをしているのは選手自身だと思う。まだまだ先はある。この敗戦にめげず、次に向かって進んでほしい。試合会場の内外を実際に体感して、これもひとつの「祭り」だと思った。

米子にも伝統の「がいな祭」があり、毎年賑わっている。その他 全日本皆生トライアスロンは、言わずと知れた全国区のイベントである。そんなひとつひとつをまとめた大きなイベントも何かありじゃないか？とふと思った。「がいな祭」中に、トライアスロン開催して、サッカーの試合のあとに、そのまま東山競技場にトライアスリート、ゴール！でサッカー選手、トライアスリート、スタッフ、市民そろったとこで、「ドーン！」

がいな祭の花火開始——！…ちょっと欲張りすぎですかね（汗）話がそれてしまいました。とにかくガイナレ魂を胸に、目指せJリーグである。僕らがついてるぞ。がんばれSC鳥取！

（記事：白石）

中央会の思い出



門脇幸一会員

もう思い出を語らなければならないのかと少しの寂しさを感じながら、8年前に入会させていただいた当時を懐かしく思い出してみます。

ニューカマーズ委員会に所属の当時、中島委員長の方針？で委員会の2次会は新入会員が気兼ねすることなく飲める多国籍系ホステスさんの多いお店がお決まりでした。毎月通ったお店で青い目の娘に恋に落ちた青年でしたが、ウクライナのめざましい経済発展の為？恋が実るには至りませんでした。†ダスヴィダーニヤ！ナターシャ。

或る日ベテラン会員のかたから「君の会社に近い鮎屋で飲み会があるから、まあとにかく来い」とお誘いがありました。会話のはずむコンパニオンさんのお陰もあり楽しく飲ませていただきましたが、その会はどうやらトライアスロンマラソン部の決起会でありました。当時は戦略的な一本釣りの手法で部員を確保していたのでしょうか。まあ楽しそうな奴だということ？マラソン部に入部を認めていただき、大会当日。午前中にコースの準備も大方整うと、私はベテラン部員のOさん、Tさんとコースのパトロールカーで、ご一緒させていただきました。しかしOさんTさんは回転寿司でのんびり喉を潤されたり、居眠りされたりで、こんなものかなあとも思っていました。ところが、陽が傾きかける頃になるとやおら気合を入れなおすように「さあて、そろそろやーか」とコースのことは頭に叩き込んでおられるのか、次から次に走りながら照明やライトを灯火させていくテキパキとした、藤沢周平の「武士の一分」のようなその仕事振りに、思わず私は「かっこえっ！」と心で叫んだのでした。

†ダスヴィダーニヤ：Досвідання（露語）「さようなら」

これが私の 変革 revolutionize

私の中央会入会への決断真意は、「商売」の為でも「人脈形成」でも「自己啓発」でもない。

こんなことを書いたら多くの方から批判をあげそうで怖いけど、もちろん前述の要素を否定するものではないが、私は自己「変革」の為に入会を決意した。

もともとサラリーマン息子の私は、「堅実」で送りバントの上手な山羊座のA型である。

倉吉東高校の選抜での快挙に刺激され、高校までは目標甲子園！！しかしその後目標を失い、大学ではブラブラ自由気ままに。そして県外に就職し、多忙であったが平々凡々な生活を送っていた。

そんな私のもとへ数年前一本の電話が鳴った。父親からであった。先代社長からいつの間にか会社を引き継いでいた父親（現社長）の後継者として、米子に帰って来いと言うのだ。即答はしなかったものの、父親から生まれて初めて頼まれた私は、了承することにした。

ある日突然目の前に、サラリーマンから社長への道が繋がったのである。この道を行けばどうなるものか 危ぶむなかれ危ぶめば道はなし踏み出せば・・・

しかし、である。迷わずになんか行けそうもありません。行けばわかるなんてちょっと身勝手ですよ。

そんな気サラサラなく30年間生きてきた私にとって、この環境変化は劇的であった。と同時に、決断したはよいがどうしても不安を払拭することができなかった。そんな矢先に、中央会への誘いがあったのは本当にラッキーだったと思う。

そして1年が過ぎ、父親を「社長」と呼ぶのにも中央会にも多少慣れてきた今日この頃、自分の思惑以上にたくさんさんの刺激を、様々な価値観を中央会からいただいた。

「人生はかけ算だ どんなにチャンスがあっても君がゼロなら意味がない」

この言葉を胸に、この道を一步一步踏み出す為に、私の自己「変革」はつづく。

（記事：高塚）

『平成20年度 委員長・副委員長交流会』

去る9月27日と、翌28日にかけて、鳥取県中小企業青年中央会の『平成20年度 委員長・副委員長交流会』が、湯梨浜町はわい温泉の「羽衣」で行われました。我が西部からは、委員長・副委員長が合計10名、また、水県副会長と増井県幹事、竹中県出向理事の合計13名の参加となりました。

長・副委員長交流会



交流会では、5つの小さなグループに別れ、それぞれのテーブルごとにグループディスカッションが行われました。初日のテーマは『より良い委員会を行うために必要なことは？』です。さすが東・中・西部の委員会を代表する委員長・副委員長だけあって、委員会に対する熱い想いを語りながらのディスカッションとなりました。

2日目は『中央会が地域にできる社会貢献とは？』という

テーマで同じくディスカッションが行われましたが、ここでも、それぞれの地域の特色を生かしながら社会に貢献している事例の紹介を通して、もう一歩前に進んだ貢献はできないか…という議論がなされました。

各グループで初めて顔を合わせる東・中部の会員も大勢いらっしゃいましたが、ディスカッションはもちろん、終了後の懇親会やその後の二次会では、ともにグラスを傾けながら大いに親睦を深め、お互いが次に会うのが楽しみに思われる、そんな交流会になったと思います。

(記事：松本)



9月度委員会報告

政治行政委員会

平成20年9月10日(水)於:米子ニューアーバンホテル 出席者/9名

議題/・役員報告
講演 『米子の線引きについて』
講師 堀安 宗威氏

環境問題委員会

平成20年9月13日(土)於:江府町地内(予定) 出席者/13名
議題/・役員報告担当例会について
・森林について 他

Neo・ラヴィ委員会

平成20年9月11日(木)於:米子食品会館 出席者/7名
議題/・役員報告
・特別委員会報告
・グループ別ディスカッション

ビジネス委員会

平成20年9月8日(月)於:レストラン ぶどうの木 出席者/10名
議題/・10月担当例会打合せ

エリアデザイン委員会

平成20年9月10日(水)於:皆生観光センター 出席者/10名
議題/・オリジナル料理の試作、検討

広報委員会

平成20年9月4日(木)於:米子食品会館 会議室 出席者/13名

議題/・役員報告
・ハンサム編集について
・9月担当例会について
・ハンサム編集について
・勉強会『今日から身につくカメラ術』
講師 マリエ・やしろ写真部 山岡里己先生

総務委員会

平成20年9月3日(水)於:米子ニューアーバンホテル 出席者/14名

議題/・役員報告
・会員拡大の件
・OB交流会の件

10月役員会報告

10月定例役員会が、平成20年10月1日(水)米子食品会館にて開催されました。当日のおもな議題は以下の通りです。

- ・10月例会開催の件
- ・鳥取県中小企業青年中央会全国大会参加についてのご案内の件
- ・その他

*なお、詳細につきましては各委員長までご参照ください。

10月例会案内

と き:平成20年10月15日(水)

と ころ:米子全日空ホテル

1部【パネルディスカッション】議題「中海圏域の未来像」
パネリスト 中田耕治(鳥取県西部中小企業青年中央会)
漆原輝之氏(米子商工会議所青年部)

コーディネーター 寺谷 寛氏(新日本海新聞社西部本社代表)
オブザーバー 松浦正敬 松江市長(中海市長会会長)

2部【対談】議題「中海圏域の未来像」(仮題)
講師 松浦正敬 松江市長(中海市長会会長)
寺谷 寛氏(新日本海新聞社西部本社代表)

担 当:ビジネス委員会

OB交流会案内

来る10月25日に、OB交流会が行われます。現役・OB会員の皆さんの多数の参加をお待ちしております。

と き:平成20年10月25日(土) 10:00~15:00

場 所:大山トムソーヤ牧場

事業内容:梨狩り・バーベキュー等

担 当:総務委員会

*なお、詳細につきましては担当の総務委員会までお尋ねください。

編集後記

暑い夏も台風13号と共に去りつつあります。朝晩の涼しさは、まさに秋の気配といったところではないでしょうか?この時期から海に山にと美味な食材が溢れてきます。メタボリックな身体にとって食欲との戦いの時期でもあります。同時に「ま、今年はいいか」と諦めの季節でもあります。先日、妻と一緒に山に入りサルナシ(キウイの原種)・マタタビなどを採り、食しました。これが実に美味しい。それにマタタビはその名の通りまた足袋(たび)が履けるほどに元気が出たように感じられました。

この時期は山歩きのおかげで体重は一時的に減るのですが、食欲には勝てずすぐに元通りです。秋の味覚を堪能しつつ山歩きをするという矛盾に、痩せるのか太るのか困り果てた身体を説得しながら、もうしばらくこの季節を楽しみたいと思います。

来月になると大山も紅葉が始まります。毎年この時期は紅葉の中にいるのですが、山の中からの眺めもなんとも良いものです。その絶景を眼前にすると、大山が私達の宝であることをつくづく感じ、大事にしなければいけないと再認識できます。歴史についても非常に興味深いことが多く、今後、機会があれば是非詳しく勉強したいものです。(須山)

